

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 元年 6 月 6 日現在

機関番号：12601

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2016～2017

課題番号：16H06763

研究課題名（和文）フレイル予防サポーターの活動参加動機による類型化と活動継続要因

研究課題名（英文）Classification of frailty checkup supporters and factors related to their intentions of continuing frailty prevention activities

研究代表者

藤崎 万裕（Fujisaki-Sueda-Sakai, Mahiro）

東京大学・高齢社会総合研究機構・特任助教

研究者番号：80782169

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,820,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、フレイル予防サポーターの活動参加動機による類型化と活動継続要因を明らかにすることを目的に実施した。まず、フレイル予防サポーターの活動参加動機による類型化では、先行研究のレビューおよびフレイル予防サポーター13名へのインタビュー調査を実施し、参加動機計16項目を抽出した。続く縦断質問紙調査では、参加者275名のデータから参加動機には、男女差があり、2因子構造をとること等が明らかとなった。データクリーニング等のデータセット作成作業が終わり次第、縦断質問紙調査の脱落者と追跡できた者、さらに追跡できた者のうち活動継続意向の程度によって研究参加者を層化し、今後詳細な分析を進める予定である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これまで住民が主体となっていく活動（住民組織活動）に着目した先行研究では、一組織に限局した活動報告やインタビュー調査に留まっていた。一方、本研究は、全国で実施されているフレイルチェック活動を担うフレイル予防サポーターを調査対象とすることで、これまで先行研究では十分に考慮されてこなかった個人属性や地域特性の差異を分析結果として提示した。また、サポーター活動をより長く継続するための活動環境や活動条件を具体的に検討できる点で研究結果が今後社会で役立つ可能性が高いと考えられる。

研究成果の概要（英文）：This study aimed to classify frailty checkup supporters (FCSs) according to their motivation and to identify factors related to continue their activities. Firstly, the researcher reviewed previous studies about community based activities and interviewed 13 FCSs about their motivation into FCS's activity. Secondly, the longitudinal study used questionnaires was organized. A total of 275 participants's data were analyzed. As results, there were differentiation of motivation between male and female and two types of motivations. After data cleaning, the researcher will analyze relationship between FCS's motivations and factors related to continue their activities in more detail.

研究分野：地域看護学

キーワード：フレイル予防 市民サポーター 類型化 活動継続意思

1. 研究開始当初の背景

高齢者が虚弱 (frailty:フレイル) にならず自立したままで生活の質を維持できることは、超高齢社会におけるサクセスフル・エイジングを我が国が世界に先駆けて達成するために必要な条件のひとつである。

フレイルとは、サルコペニア (加齢性筋肉減少症) を中心とした「身体的虚弱」、うつや認知機能低下を代表とする「精神的虚弱」、生活の広がりや人とのつながりの欠如といった「社会性の虚弱」の三側面が高齢期の虚弱を捉える概念である (Friedら, 2001)。

高齢者に対するより早期からの包括的なフレイル予防が重要とされている一方で、高齢者のフレイル予防に対する意識・行動変容を促す介入 (ポピュレーション・アプローチ) をコミュニティ参加型で展開していくための環境・体制づくりはまだ整っていない。

コミュニティ介入に関する先行研究では、住民活動などのインフォーマルな活動が活性化することが重要であると述べている (Jacksonら, 1989; Robinsonら, 2000; Shieldsら, 2000)。また、コミュニティにおける住民活動を促進するメリットとして、地域住民が主体となって健康教育等を行うことは同じ立場の住民に教育内容がスムーズに浸透されやすいこと、活動に参加したメンバー自身の意識や行動変容が促されること、メンバーの家族・友人等への波及効果が期待できること等が報告されている (Hardyら, 2005; Johnsonら, 2005)。

以上のように、高齢者のフレイル予防においても同じ地域の住民という立場でフレイル予防活動を行う「フレイル予防サポーター」の活動が、コミュニティ参加型フレイル予防介入を展開する上では重要と考えられる。今後、飯島ら (東京大学高齢社会総合研究機構) のフレイル予防研究班では、全国でフレイル予防サポーターの養成を行う予定であるが、介入対象地域の住民がどのようにフレイル予防サポーターに関心を抱き活動に参加し始めたのか、また、サポーター活動をより長く継続するためにどのような環境や体制が必要であるのかについては未だ十分に明らかになっていない。

2. 研究の目的

本研究は、飯島ら (東京大学高齢社会総合研究機構) がフレイル予防介入を行ってきた千葉県柏市のフレイル予防サポーターと、今後フレイル予防介入を展開する予定である地域 (神奈川県茅ヶ崎市・小田原市、滋賀県栗東市等) のフレイル予防サポーターを対象として、フレイル予防サポーターの活動参加動機による類型化と活動継続要因を明らかにすることを目的とする。

3. 研究の方法

本研究では、以下の大きな2つの研究課題 (研究A・研究B) に取り組む計画で始まった。

研究A: フレイル予防サポーターの活動参加動機による類型化

[研究A-1] 先行研究のレビューを行い、フレイル予防サポーターの支援活動に関わる要因を体系的に整理する。

時期:平成28年8月~9月

方法:システムティック・レビュー・アプローチを用いる。

キーワード frailty、フレイル予防、住民組織活動等

文献検索 Pubmed, Web of knowledge, MEDLINE を用いる。

ハンドサーチ Gerontologist, Geriatrics & Gerontology International, 日本老年医学会誌、

日本地域看護学会誌等に対して行う。

期待される結果:

フレイル予防サポーター活動への参加動機に関連する要因が先行研究から抽出される。

フレイル予防サポーター参加動機に関連する要因は、左図1のように、計画的行動理論を参考に体系的に整理する (Ajzen, 1991)。

[研究A-2] フレイル予防サポーターの活動参加動機に関連する要因の内的妥当性の確保

時期:平成28年10~12月

方法:サポーター12~16名へのヒアリング調査・検討委員会で参加動機に関連する要因の

検討を行い、研究A-3における質問紙調査の質問項目の洗練を行う。

分析:Krippendorff (2004) による内容分析の手法を用いて行う。

期待される結果:研究A-1で抽出されたフレイル予防サポーターの活動参加動機に関連する要因に加え、実際に活動しているサポーターへのヒアリング調査および検討委員会での検討により、活動参加動機に関連する要因の洗練を行うことができる。

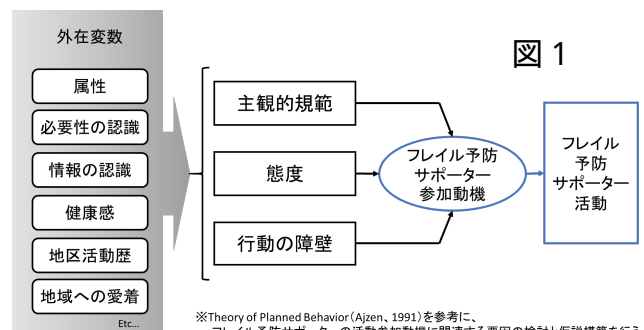


図1

※Theory of Planned Behavior (Ajzen, 1991) を参考に、フレイル予防サポーターの活動参加動機に関連する要因の検討と仮説構築を行う

[研究 A-3] フレイル予防サポーターを活動参加動機によって分類する。

方法:フレイル予防サポーター約 350 名に対し、質問紙調査を行う(千葉県柏市、神奈川県茅ヶ崎市・小田原市等)。

研究 A-1・研究 A-2 で明らかになった関連要因への回答の有無等の情報をもとに、フレイル予防サポーターを分類する。

分析:個別の事例における質問紙への回答の分布および決定木分析(Decision tree analysis:CHAID 分析)を用いて類型化を行う。

期待される結果:

活動参加動機によってフレイル予防サポーターを分類することができる。

研究 B:フレイル予防サポーターの活動継続要因の明確化

調査対象地域によって、サポーター養成時期が異なるため、調査期間に幅がある。

方法:研究 A-3 の質問紙調査をベースライン調査とする、追跡の質問紙調査を行う。

分析:

サポーター活動継続期間と活動参加回数の記述統計量を算出する。

従属変数がフレイル予防サポーター活動継続期間と活動参加回数、独立変数がサポーター活動参加動機、サポーター個人属性、地域特性とし、サポーター個人を第一層、地域変数(調査地域によってサポーターの)を第二層とする線形混合モデル分析を行う。

期待される結果:

フレイル予防サポーターの個人属性・地域特性、および、活動参加動機等の変数の中から、フレイル予防サポーターの活動継続に影響を及ぼす要因が具体的に明らかになる。

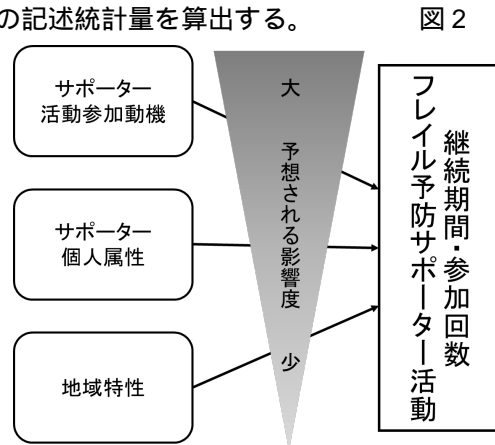


図 2

質問紙調査の補足調査

対象地域によって、質問紙調査回答時期が異なるため、調査期間に幅がある。

方法:質問紙調査で得られた結果に対し、ヒアリング調査(メンバー・チェックを兼ねる)を行う。

ヒアリング内容:

調査対象は、フレイル予防サポーターおよび自治体職員とする。

- A) 研究 B の質問紙調査の結果に対する意見や感想を得る。
- B) フレイル予防サポーターの活動環境や体制に関する意見を得る。

引用文献:

- 1) Ajzen, I. (1991) The theory of planned behavior. *Organizational Behavior and Human Decision Processes*. 50.179-211.
- 2) Krippendorff K. Content analysis: An introduction to its methodology. 2nd ed. Thousand Oaks: Sage Publications; 2004.

4. 研究成果

[研究 A-1]・[研究 A-2]

先行研究のレビューを行い、フレイル予防サポーターの支援活動に関わる要因を体系的に整理した後、フレイル予防サポーターの活動参加動機に関連する要因の内的妥当性の確保のため、柏市フレイル予防サポーター13名にヒアリング調査を実施した。

調査の同意が得られた者の属性は、男性6名(46.2%)・女性7名(53.8%)であった。参加動機を Krippendorff (2004) による内容分析の手法を用いて行った結果、以下の16項目が抽出された。

- 1) サポーター活動を通して得られる知識や経験を、地域の人々に還元できる
- 2) サポーター活動を通して得られる知識や経験で、自分自身がより健康的になれる
- 3) サポーター活動を通して得られる知識や経験で、自分自身の能力や価値を高められる
- 4) サポーター活動を通して得られる知識や経験を他の人に披露して満足感を得たい
- 5) まずは養成研修を受けてみて、サポーターの活動について知りたいと思った
- 6) サポーター活動は、過去の失敗したり後悔したりした経験を払拭してくれるものだ
- 7) サポーター活動は、自分の持っている能力を活かせるものだ
- 8) これまでの地域活動や仕事での経験から、サポーター活動もできる自信があった
- 9) サポーター養成講座に知人・友人が申し込んだので、わたしも応募した
- 10) 知人・友人(自治体職員含む)にサポーター活動に参加するよう、積極的に勧められた
- 11) 知人・友人(自治体職員含む)から、サポーターの活動について具体的に聞いていた

〔産業財産権〕

出願状況（計 0 件）

取得状況（計 0 件）

〔その他〕

ホームページ等：なし

6．研究組織

(1)研究分担者

(2)研究協力者

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。